

## 第55回試験研究成果発表会（野菜Ⅳ）発表概要

【日時】平成30年2月14日（水）10:00～15:25

【会場】農林総合研究センター農本館（千葉市緑区大膳野町808）

### 発表1 成果発表（10:10～10:35）

マーケティング活動を効果的に進めよう！

－野菜産地での活動事例分析－

研究マネジメント室 高橋 ゆうき

県内外の野菜産地でマーケティング活動に取り組んだ事例から成功要因を整理した結果、①活動には「問題点の認知」から「解決方法の実証」までの5段階のステージがある、②問題点の認知には、顧客、他産地、自産地の3側面の分析が有効、③重要市場調査、消費者調査や試験販売等の具体的データに基づいた解決方法の検討や実証が重要、④製品対策や販売手法の選択、プロモーション等の手法を状況により組み合わせて実施することが重要、等の点が分かりました。



グループインタビューの様子

### 発表2 成果発表（10:35～11:00）

野菜畑及び野菜施設土壌の現状と施肥管理の実態

－現在の課題と今後の圃場管理について－

土壌環境研究室 松本 崇志

平成25～28年度で県内の野菜畑37地点、野菜施設20地点の土壌調査を行い、過去の調査結果との比較から、農耕地土壌の実態と変化を明らかにしました。作土層の深さの平均値は野菜畑で14cm、野菜施設で16cmであり、平成6～10年度の調査と比べ、浅くなっていました。化学性を集計した平均値は、野菜畑、野菜施設ともに可給態リン酸が過剰に蓄積していたので、適正な施肥管理が必要です。



野菜畑の土壌調査

**発表3** 成果発表 (11:10~11:35)

地球温暖化防止における農地の役割

—県内農地の炭素量の実態と有機物施用による効果—

土壌環境研究室 松本 崇志

地球温暖化防止に向けて、平成 25~28 年度で県内の 152 地点の農耕地土壌の炭素貯留量を調査し、有機物施用状況等に関する聴き取り調査を併せて実施しました。さらに、牛ふん堆肥の長期連用による土壌の炭素貯留量への影響も調査しました。その結果、炭素貯留量は黒ボク土で最も多く、水田、畑ともに堆肥の施用割合は減少しています。堆肥の施用量が異なる圃場で炭素貯留量を比較すると、堆肥の施用量が多いほど炭素貯留量は多くなりました。



炭素分析装置

**発表4** 成果発表 (11:35~12:00)

葉菜類の有機栽培の土づくり—可給態窒素の目標値—

土壌環境研究室 塚本 崇志

有機栽培は地力に依存した生産方式であり、安定した収量を確保するためには、圃場の地力窒素と呼ばれる可給態窒素を高める必要があります。ホウレンソウ等の葉菜類において、圃場の可給態窒素含量と地上部新鮮重との関係を調査しました。その結果から、十分な収量が得られる可給態窒素の目標値は6~7mg/100g であると見込まれました。また、煮沸浸出法という手法で簡易・迅速に土壌の可給態窒素含量の測定が可能でした。



ホウレンソウの有機栽培

**発表5** 成果発表 (13:00~13:25)

良食味黒皮種なしスイカの選定と果皮の日焼け対策

水稲・畑地園芸研究所 東総野菜研究室 千吉良 敦史

食味が今ひとつと言われていた種なしスイカですが、近年は良食味の品種が育成されています。一方、黒皮スイカは一般の縞皮のものとは比べ、販売時に差別化がしやすいというメリットがあります。そこで、食味のよさや栽培のしやすさも加味して、東総地域における黒皮種なしの優良品種を選定しました。また、黒皮スイカで問題となる果皮の日焼け対策についても併せて試験しましたので、結果について紹介します。



「ブラックジャック」

**発表6** 成果発表 (13:25~13:50)

転炉スラグの施用による土壌 pH 調整がスイカ及び後作目目の生育及び収量に及ぼす影響

野菜研究室 木村 美紀

ホモプシス根腐病対策の1つとして、被害軽減効果が期待されている転炉スラグを用いた土壌 pH 調整が、スイカ及び後作目目（ニンジン・バレイショ・ダイコン）の生育及び収量、品質に及ぼす影響を試験しました。その結果、いずれの品目も収量への影響はありませんでしたが、スイカの MgO 吸収及びニンジンの出芽率、バレイショそうか病発生程度に影響が見られました。



転炉スラグを施用した  
スイカ栽培

**発表7** 成果発表 (13:50~14:15)

ミニトマトの裂果を減らす環境制御法

野菜研究室 鈴木 秀章

ミニトマトの促成栽培において、結露センサー付き複合環境制御装置を用いた環境制御によりハウス内の結露値を下げる管理を行うことで、11~12月のミニトマトの裂果の発生を安定して減らせることがわかりました。制御法の概要を紹介します。



複合環境制御を用いた  
ミニトマト栽培

**発表8** 成果発表 (14:15~14:40)

EOD-heating 処理を取り入れた促成イチゴ栽培の新暖房温度管理

野菜研究室 深尾 聡

イチゴの促成栽培において、暖房設定を日没直後から3時間 12℃で加温し、その後5℃加温とすると、慣行の8℃一定加温に対し燃油削減効果が高いことが明らかになりました。開花や果実成熟の遅れを防ぐために、厳冬期となる12月~1月は換気温度を上げて昼温を確保する必要があることもわかりました。



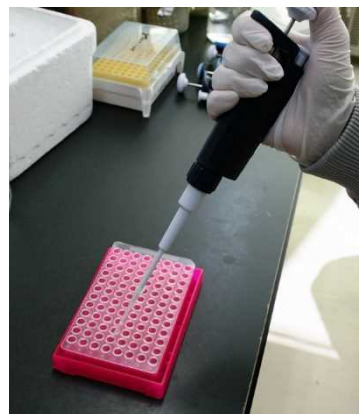
EOD-heating 処理の導入

**発表9** 成果発表 (14:50~15:15)

イチゴ炭疽病防除のための効率的検査法の開発

生物工学研究室 中田菜々子

イチゴ苗が炭疽病に感染しているかどうかを調べる遺伝子検査技術を改良し、コストや労力を削減しました。この検査によって炭疽病が潜在的に感染している親株を見つけ、4月中旬までに除去することで、2次感染を抑えられることも明らかになりました。検査の概要を発表します。



遺伝子検査による判別